



に関連する数理科学、脳に学んだ革新的情報処理システムの開発、計算論的神経科学に加えて、これまでの研究の経験と蓄積が十分に生かせる脳情報双方向活用技術からニューロインフォマティクスまで、研究の幅が広がることを切望しています。

本号には、昨年玉川大学の鮫島和行さんらが中心になって組織された ASCONE で私がさせていただいた講演を、情報通信研究機構、ATR 脳情報研究所の田中宏和さん、宮脇陽一さんがまとめてくださった解説記事が掲載されています。日本では、米国の多数の大学の神経科学プログラムや Bio-X、EU の Computational Neuroscience Summer Course のように、現代的な神経科学を総合的・体系的に、学部学生、大学院生、若い研究者に教育する仕組みがありませんでした。これが日本の神経科学の最大の弱点かもしれません。その中で、沖縄科学技術大学院大学先行研究事業、ATR 脳情報研究所の銅谷賢治さんらが中心になって進めてこられた NISS、OCNC の流れをくんで、新たに日本語で学部学生でも聴講できるようなコースが始まったということは、大変素晴らしいことだと思います。その第 1 回に招いていただいたことは、大変うれしくまた光栄なことです。このような試みが今後も続けられ未来の神経回路学会を支える人材がたくさん出てこられることを心から祈っております。